

私の歲月

池波正太郎

講談社

私の歲月

昭和54年2月19日

第1刷発行



著者 池波正太郎

発行者 野間省一

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

980円

製本所 藤沢製本株式会社

発行所

東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112
電話 (03)945-1111(大代表)
振替 東京 8-3930

株式 講談社
会社

0095-305909-2253(0) (文二)

© 池波正太郎 1979

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan

下町

東京の下町

縁台

下町ツ子座談会（清水幾太郎・植草甚一・池波正太郎）

地震・カミナリ・火事・オヤジ

対談（池田弥三郎・池波正太郎）

隅田川情緒

食べもの

小説の中の食欲

私の銀座食物遍歴

当世豆腐考

五年間の十月一日

座談会（茂出木心護・江原恵・池波正太郎）

庶民の味の心意気

旅

休息の旅

信州・上田から松代へ

フランスの田舎

147 143 129

102 95 93 89

映画

映画を楽しんだ四十年

架空対談 ジャン・ギャバン

インタビュー 池波正太郎の映画手帖

178 157 153

生活

インタビュー 池波正太郎の青春・小説・人生

機械に飯を食べさせろ

豪傑

215 210 199

対談（佐多稲子・池波正太郎）

いい男といい女

タバコ

仕掛人に憩いなし

歳月

生き形見

梅安こぼればなし

人間はね、高踏的じゃないんだ

対談（中一弥・池波正太郎）

江戸に生きる実感

余裕ある時代の風俗

326 310

305 261 255 251 249 242 218

私の 歳の 月

装幀・カット 中林忠良

題字 池波正太郎

下

町



東京の下町

こころみに、手もとにある辞典で〈下町〉という語句を引いてみようか。

①町のうちの低地の部分で、商工業が行われる地区。山手やまのてに対する呼称。②特に東京都東部一帯の低地の通称。浅草・上野・日本橋・銀座などの繁華街がある。江戸時代からの商工業地区で、いわゆる江戸っ子は本来ここで生まれ育った人をいう。

と、ある。

これだけでは概念がいねんにすぎないが、さらに、これを煮つめれば、下町は庶民の住む場所というイメージになるう。

明治維新後の東京の山ノ手は、それまでの武家地へ、諸官庁や、新政府によって成り上った諸国の人びとがあつまり、貴族になったり、軍人になったり、官僚や政治家になったりした。

そうして見ると、

「いわゆる江戸っ子は、本来、下町に生まれ育った人をいう」

とある辞書の簡略な記述に、うなずけぬこともない。

俗に「三代つづかなくては、江戸っ子ではない」などというが、これは江戸であろうが大阪であろうが、金沢であろうが何処であろうが、みな同じことであって、習俗も季節も、それぞれ異なる土地に住みつき、その土地の生活が、しっくりと身にそなわるまでは、やはり、三代はかかるという意味なのであろう。

国は小さいが、北から南まで、多彩をきわめる日本の風土は、二百何十年にわたった封建時代によって、それぞれに特殊な風俗と文化をつくりあげた。

江戸が、徳川將軍の城下町としての性格をもち、それが独自の風俗を生み出したことは、いうをまたない。

それが現代になって、交通・經濟の目まぐるしい発達により、いまや、東京も大阪も金沢も同じ風俗と生活に単一化しつつある。

〈庶民〉という言葉も、いまは実感をともなわぬ。

テレビが一つあるか、三つあるか。または部屋数が少ないか多いか。自動車があるかないか……およそ、それほどの相違だけで、会社員も職人も社長も大臣も、女優も主婦も、すべてが電

化生活を送り、大差ない食料を口にし、日本の各地へ、諸外国への旅行をたのしむ。

ただ、第二次大戦に破壊されなかった町には、むかしの人びとの生活がしみついた〈家〉と〈道具〉が残されてい、この二つのものが、そこに暮す人びとに複雑で微妙な影響をあたえる。

その代表が、京都であろう。

これとても、フランスのパリと同様に、とどまることを知らぬ現代文明の侵入によって、姿を変えつつある。

たとえば、ここに、むかしの火鉢が一つあるとしよう。

冬になって、火鉢を出し、炭火を起し、むかしの暮しを想い出そうとしても、住んでいる町には炭屋もない。

若い夫婦が月給にふさわしい部屋を借りようとすれば、その部屋代は安くとも浴室がついていない。それなら銭湯へ行こうとおもえば、すでに町の銭湯は激減するばかりなので、場合によってはバス代をはらって銭湯へ出かけることになってしまう。

住居費と収入とのつり合いが、このように奇妙なものとなってしまうことを^み看ても、以前、私どもがつかっていた〈庶民〉という語感^みは薄れつつある。

近い将来に、時代は、また激しく変って行くであろうが、いまのところ、日本は退屈な単一化を目ざしてすすむだけなのだ。

しかし、東京にも、むかしの下町の姿が全く消えてしまったかというところ、まだ消えつくしてはいない。

先にのべたように、江戸から東京となったこの都市へ、何代にもわたって住み暮してきた人びとには、他に故郷がない。

私なども、両親の先祖は富山・千葉の両県だが、それぞれ天保のころから江戸に住みつき、私までつづいているので、いま、たとえば先祖が出生した土地へ行ってみても、だれ一人、知っている者としてないわけだ。

ゆえに、戦災を受けて灰になった自分たちの町へ、その大半が終戦後に帰らざるを得ない。

たとえば、私が生まれ育った浅草の或る町など、いまも、むかしのままの人びとがむかしのままの場所に住み暮している。

そして、こういう人びとが、東京の下町の習俗を、わずかにつたえ残していることになる。

まして、わずかに焼け残った家と道具をもつ人びとは、押し寄せる破壊化の中で、最後の最後まで、むかしの下町の暮しをまもりぬこうとしている。

或る幼女が、祖父に、

「おじいちゃん、牧場を買ってちょうだい」

と、いった。

「牧場なんか買って、どうする？」

「牛を飼うの」

幼女は絵本か何かで牧場の絵を見たのであろう。

「牛は大きくて、飼うのに大変だよ」

すると幼女が、

「だって犬ワンぐらいでしょ」

そういったというのだ。

この幼女にかぎらず、東京の下町には牛も馬も見ることがない子供たちがいる。

むかしの下町には牛も、馬もいた。

夏の夕暮れには、蝙蝠こゝろが飛び交い、近くに川がながれていれば、螢も飛んだ。

私なども、上野の不忍池のあたりで螢をつかまえてきて、蚊帳の中に放したりした。

蚊遣かやりの香ばしい匂いがこもる部屋の闇の中で、祖父と祖母の寝息がきこえる。

そして、青い蚊帳の中で、三つ四つと、小さな光りが明滅しながらただよっているのを、子供
ごころにも夢心地に見とれていたものであった。

下町の子供たちのたのしみを書きつらねていたら、もう切りがない。

夏休みが来ても、東京をはなれて何処かへ行きたいなどと、おもったことは一度もない。

下町には野原もあり、いたるところに広い材木置場があり、映画館・芝居小屋・寄席などが、それぞれの町にあったし、子供が親からもろう小遣いを貯めたり、つかったりすることによって、大人のまねがいくらでもできた。

（何をして遊ぼうか……？）

と、選択に迷うほど、たのしみが豊富だったのである。

玩具などというものは、みんな、自分でつくってしまった。

切り出しや、鋸・鉋を家から持ち出し、木や竹を使って、竹馬も木刀も水鉄砲も、みんな自分でつくったものだ。

手と足と頭のはたらきで、子供たちは、際限もなく、自分のたのしみをつくり出すことができた。

夏の夜は、通日も道も、町の人びとの「サロン」になってしまふ。

大人たちは一日の労働の汗をながしてから、道へ縁台を出し、世間ばなしに興じたり、将棋をさしたりする。

高層建築がほとんど無かった町に、涼風はおもうままに吹きぬけ、冬の空地では子供たちが焚火で芋を焼いた。